

# 博士学位論文審査要旨

2020年1月9日

論文題目： 『覚一本平家物語』考

学位申請者： 城阪 早紀

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 廣田 收

副査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

要 旨：

戦後、平家物語研究では諸本群を大きく二系統に分け、琵琶法師の芸能としての語りの痕跡を残す伝本として語り本系を古態と捉え、後に読者に向けて書かれた読み本系が生み出されたと理解されていた。その後研究の進展により、現在では読み本系の延慶本が古態を残す伝本として評価は逆転している。

本論文は、第一章で、このような研究史を踏まえ、諸本間の前後関係や影響関係をいったん留保し、それぞれの伝本が独立性をもつ本文であると捉える。そして、軍記物語の根幹をなす合戦譚に注目して、語り本系の代表的本文である覚一本の特質を解明すべく、特に延慶本を対照させることを分析方法とする。第二章・第三章では、合戦場面の「名のり」の全用例を延慶本について、第四章・第五章では、覚一本について逐一検討し、語句の意味・用法、合戦の種類表現、章段の構成の異同を明らかにしている。すなわち、延慶本は合戦を一時的で偶然性の強いものとして描き、臨場感を描き出しているのに対して、覚一本は、「名のり」が自らの名を敵だけに名のる行為として限定するとともに、装束描写や名のり、戦闘描写に類型性を与え場面として確立させることで戦場の緊張感を高めていることを明らかにした。第六章では「法住寺合戦」、第七章では「木曾最期」、第八章では「一二之懸」、第九章では「能登殿最期」などの合戦を詳細に検討し、延慶本が、源氏武者の動向を多元的に描くのに対して、覚一本は源氏軍の動向を一元化して描いていることを明らかにした。また、延慶本は源氏が平家を滅ぼして行くことを描くのに対して、覚一本は、平家が源氏に滅ぼされて行くことを描くことを明らかにしている。

本論文が、従来閑却されてきた合戦譚に注目し、代表的本文における異同を手がかりに、覚一本が平家の滅びを様式的な叙述をもって描くところに特質があることを実証的に解明したことは、研究史上における画期的な成果として特筆すべきものである。

したがって、本論文は、博士（国文学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2020年1月9日

論文題目： 『覚一本平家物語』考

学位申請者： 城阪 早紀

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 廣田 収

副査： 文学研究科 教授 植木 朝子

副査： 文学研究科 教授 藤井 俊博

要 旨：

上記審査委員3名は、2020年1月8日、午後6時30分から約2時間にわたって、徳照館2階共同利用室において、公開で学位申請者に対して口頭試問を行なった。

学位申請者は、提出論文について審査委員3名から出された研究内容に関して、伝本諸本の理解、本文注釈の方法、諸本間の異同についての分析方法、物語の構成と表現との関係など、さまざまな質疑に対して的確に答えるとともに、専門分野における深い学識を示した。同時に、本論文の研究水準の高さと学術的な価値を証明した。さらに、口頭試問に引き続き行われた語学試験において、学位申請者は内容に関連する英語資料の読解を通して、外国語（英語）においても十分な学力を有することが確認された。

以上のことから、本学位申請者の専門分野に関する学力ならびに語学力は充分なものであると認める。よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：『覚一本平家物語』考

氏名：城阪早紀

要旨：

本研究が『平家物語』研究ではなく『覚一本平家物語』研究を掲げる理由は、『平家物語』という作品を論じることの限界性を自覚しているためである。周知の通り、『平家物語』には多くの伝本群が存在する。それゆえ、個々の伝本を読む前に、平家物語諸本群をどのように捉え、理解するのか、という問題がまずあり、諸本研究はその変遷や共通項を探ることが中心であった。ために、伝本間の相違は看過されてきたといえる。覚一本と延慶本が比較されることはあっても、その差異は、延慶本の本文から覚一本へ、つまり未整理の段階にあったものが語りによって物語として整えられた、という図式で把握されることが多かった。

これまでは『平家物語』という作品名に覆い隠されていたために見えてこなかったが、覚一本と延慶本の差異に着目し、それぞれの表現の意味するところを汲み取ってゆくと、従来の図式では把握しきれない、作品としての本質に関わるほどの大きな差異を抱えていると思われる。

本研究はこうした問題意識に基づいて、軍記物語の根幹を担い、かつ各伝本編者の裁量によるところが大きいと目される合戦譚を対象として、Ⅰ（構成）、Ⅱ（表現）の異同に、新たにⅢ（語句の意味・用法）の異同をくわえた三つの観点を組み合わせることによって、覚一本の描いた物語を延慶本の比較から読み解くものである。各章の論旨は以下の通りである。

本論文は、二部構成である。第一部では、合戦を構成する重要な要素である名のりに着目して、合戦譚の描出法の差異を考察した。

第一章では、平家物語研究史の到達点と課題をまとめ、本研究の立場を述べた。

第二章では、延慶本の動詞「名のる」と「名のり申す」計六二例の意味・用法を記述した。そして、合戦場面で動詞「名のる」「名のり申す」を伴って発言する事例から、延慶本の名のりの定義を導いた。

第三章では、前章で導いた定義によって調査を行ない、延慶本に六六例の名のりがあることを明らかにした。この六六例は、名のる人物の置かれた状況によって一〇分類できる。これまで合戦の名のりは、合戦の前や、先陣を遂げた時、敵を討ち取った時、一騎打ちの時に行われるものとされてきたが、本調査によって、延慶本ではこうした時だけでなく、多岐にわたる状況下で名のりが描かれていることが明らかになった。総じて延慶本は、合戦を描く型や展開を多く持ち、その戦況下での人物の行動と判断を積み重ねるという方法によって、一回性と偶然性の強い、臨場感あふれる合戦を描く方法を獲得したと結論づけた。

第四章では、覚一本の動詞「名のる」と「名のり申す」計七三例の意味・用法を記述した。第二章で論じた延慶本の結果と比較をすることで、同じ語の意味・用法であっても、覚一本と延慶本とでは通底する部分と、そうでない部分があること、そして覚一本と延慶本がそれぞれの指針によって語を選択していることを明らかにした。また覚一本には、合戦場面で動詞「名のる」「名のり申す」を伴って発言する事例から、覚一本の名のりの定義を導いた。

第五章では、第四章で導いた定義によって調査を行ない、覚一本には三一例の名のりがあることを明らかにした。三一例を、名のる人物の置かれた状況によって五分類し、第三章で論じた延慶本との比較から検討した。覚一本には、動詞「名のる」を伴う類型的な名のりと、動詞「名の

る」を伴わない類型的でない名のみがあるが、本章では特に類型的な名のみを取り上げ、表現と状況の両方が類型に貫かれていることを確認した。そして覚一本は、同じ表現・同じ状況の名のみを物語中で繰り返すことによって、これから起こるであろう展開を、物語を読む者にも聞く者にも予想させ、その脳裡に実体感を伴う合戦を映し出す方法を獲得したと結論づけた。

以上第一部では、覚一本と延慶本の名のみを検討した。その用例数を比べると、覚一本（三一例）は延慶本（六六例）の半数以下である。その理由として、定義の異なりがあげられるが、この定義の異なりは合戦の叙述法の差異に通じるものと考えられる。すなわち、延慶本の名のみは味方に対して行うものも含んでいる。そこには源氏武者同士の駆け引きや心理戦が描かれており、平家を攻め落とす源氏方の動向を丹念に追う姿勢が看取された。対する覚一本は、名のみを相手に敵に限定することで、敵と味方とが対峙した戦場の緊張感を描いていた。つまり覚一本は、源氏方の動向を一元化することによって、源氏と平家の合戦に焦点を当てた合戦を構成していたといえる。

第二部では、第一部で論じた名のみを含む合戦譚について、具体的に検討した。第六章と第七章では木曾義仲にまつわる合戦譚を、第八章と第九章では源平合戦を取り上げた。これは、源義経に滅ぼされる、義仲と平家一門との描き分けを明らかにするためである。

第六章では、従来、諸本間の異同が論じられてこなかった「法住寺合戦」を取り上げた。延慶本は義仲を、清盛と同じ悪行人であり、平家一門と同様に頼朝によって滅ぼされる者として造型している。一方の覚一本は、義仲を悪行人ではなく「をこ者」として造型していた。それは、巻一から重ねてきた清盛の悪行が、義仲の悪行によって相対的に軽くなることのないよう意図したものと考えられる。

第七章では、従来、諸本間の異同がほとんどないとされてきた「木曾最期」を取り上げた。延慶本での義仲は、自らが望んだ通り、今井兼平と共に存分に戦い、今井が供をすることによって、「一所」の死を遂げる。しかし覚一本の義仲は、今井と共に「最後のいくさ」をして「一所」で「討死」することを望んだが、どちらも叶わず、「いふかひなき奴原」に討たれるという、無念な最期を遂げた人物として描かれていることを指摘した。

第八章では、一谷合戦より「一二之懸」を取り上げた。「一二之懸」の構図を読み解くと、延慶本が〈熊谷〉と〈平山〉という二人の源氏武者の先陣争いに焦点を当てるのに対し、覚一本は、〈源氏〉熊谷直実と〈平家〉平盛嗣の対立を焦点としていた。この構図の違いは、第一部で明らかにした、延慶本が源氏武者の動向を多角的に捉えるのに対し、覚一本は源氏軍の動きを一元化することによって源平の合戦を構成するという結論と符号する。覚一本と延慶本が、別の構図で合戦を描いているということは、それぞれの編者たちが物語を新たな視座から捉え直し、独自の物語として紡ぎだした結果と考えることができる。

第九章では、壇浦合戦より「能登殿最期」を取り上げた。延慶本は教経の最期を、義経に敗れても戦いをやめず、無益な殺生を続けるものとして描いていた。ところが覚一本で敗走するのは義経のほうであり、その最期は、教経を生捕りにしようとする安芸兄弟を、教経が「したがへ」たとすることで、最後まで源氏に屈することのないものとして描いていた。覚一本での教経の最期は類型から逸脱するものであるが、直後に続く知盛の入水は、乳母子と「一所」で死ぬという覚一本の型に則ったものである。覚一本はここでも類型と、類型から逸脱するものとの双方を使い分けていた。

以上の考察から得られた結論は、次の三点である。

一点目は、同じ語句であっても、その意味するところや用法が異なることを、覚一本と延慶本の異同として定義したことである。分析した語数は十分とは言えないが、覚一本のみならず、延慶本にあっても、それぞれの指針によって語を選択していることを明らかにした。

二点目は、類型表現についてである。覚一本の類型表現は「語り」の証左とされてきたが、その意義は、語りとの関係によらずとも説明できる。覚一本は類型表現を、合戦を華々しいものと

描くためだけでなく、時に攻撃を間接的なものとして描くためにも使用していた。また一方では、積み上げてきた類型を崩すことによって、教経の最期を比類なきものとして描いてもいる。つまり、覚一本は、自らの物語に沿った合戦譚を構成するために、類型とその類型から逸脱するものを自在に操っていたといえる。

三点目は、平家物語という作品と、覚一本・延慶本という諸本との関係についてである。これまで覚一本は語りとの関係によって、延慶本はその古態性によって評価されてきた。そのため、覚一本と延慶本を比較する場合、覚一本を基軸とする時には、不整合であったものが文学としての達成を遂げる過程を読み取り、また延慶本を基軸とするときには、覚一本では消し去られてしまった編纂の痕跡と読みとる方向で論じられることが多かった。

しかし本研究によって、雑纂的な性格とされてきた延慶本にあっても、一つの合戦像を結んでいることが明らかになった。それは、源氏武者の動向に注意を払い、どのように源氏軍が平家方を滅ぼしたのかに焦点を当てて合戦譚を構成してゆくというものである。一方の覚一本は、源氏方の動向を一元化し、源氏と平家の対立に焦点を当てるといふ、延慶本とは異なる合戦譚を構成していた。このことは、覚一本が義仲と平家一門とを対等に扱わないことから読みとれる。義仲の最期を無念なものとして描く一方で、平家滅亡の場面では、義仲の遂げられなかった最期を、教経と知盛が遂げたとすることで、平家の滅びに収斂させるかたちで物語を展開していた。

総じて本研究では、延慶本の一語一語に即した読解によって新たな読みを開拓し、その対比から覚一本を精読することによって、覚一本と延慶本が、各編者らの構想に基づいた、別の物語であることを明らかにした。これは、従来の『平家物語』という、諸本群を束ねた一作品を想定する観点からは達することのできなかつた結論といえる。延慶本は、源氏が平家を滅ぼしてゆく様を主軸に据えた平家物語であり、覚一本は、平家が源氏に滅ぼされてゆく様を主軸に据えた平家物語であった。